

# Alert 反天皇制運動 28号

[通巻 410 号]  
2018 年  
10 月 16 日発行

第 28 期・反天皇制運動連絡会

## 今月の Alert

● 本当に終わりにしたい天皇制——\*2

反天ジャーナル ●——捨てられし猫、宮下守、橙\*3

状況批評 ● あらためて裕仁の戦争責任を考える  
——オウム真理教元幹部らの死刑執行で——中嶋啓明\*4

書評 ● 『ブラックボランティヤ』——八月の太陽のもとで——暗黒聖闘士\*7

紹介 ● 反天連パンフ『Alert!! 「代替わり」状況へ』——高橋寿臣\*8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(101)

● 日米首脳会談共同声明から見抜くべきこと——太田昌国\*9

マスコミしかけの天皇制(27)

● 天皇が「神格」をえる(カミとなる)儀式をめぐる——(壊憲天皇明仁)その25

——天野恵一\*10

野次馬日誌\*11 集会の真相\*13 学習会報告\*15

反天日誌\*16 集会情報\*16

6月28日、神戸朝鮮高級学校の生徒たちが修学旅行で朝鮮を訪問し日本に戻ってきたとき、関西空港での税関検査で、朝鮮の親戚などからもらったお土産を没収(税関は「任意放棄」と称する)されるという事件が起った。在日朝鮮人社会はもちろん、韓国社会でも問題となり、7月3日には、ソウル日本大使館前で250余団体の賛同のもと、抗議の記者会見が行なわれ、9月12日に「大半」を返還するという報道がなされたが、14日には別の学生団体が没収されている。

日本は2006年、朝鮮のミサイル発射訓練、核実験を口実に、万景峰92号の入港禁止措置など、日本単独の「制裁措置」を行ない強化してきた。朝鮮と日本の間のヒト、モノ、カネの動きを遮断しようというものであるが、もともと日本と朝鮮の間に大きな経済的関係があったわけではなく、「制裁」は、在日朝鮮人に対するイジメとして、その生活に大きなダメージを与えてきた。万景峰92号が入港禁止になったことにより、飛行機での移動が困難な高齢者や障害者、病弱な人たちは、実質的に祖国との往来が閉ざされてしまった。朝鮮高校生の祖国訪問も、飛行機便への変更により大きな負担増となっている。日本の学会が朝鮮との間で行なっていた学術誌の交換も禁止され、相互の学術交流ができない状況である。「制裁」開始後、在日朝鮮人に対する民族差別、迫害行為が多発した。拉致問題以降、日本社会に形成された「反朝鮮・反総聯」の風潮が、「制裁」によって増幅され、在日朝鮮人に直接の暴力が向けられた。

これらの「制裁」は、国際法・人道法上の制約を逸脱して在日朝鮮人の人権を侵害しており、ただちに廃止されるべきである。日本は自らの植民地支配責任を清算した上で、日朝の国交正常化に努めなければならない。(ぐずら)



250 円

● 定期購読をお願いします(送料共年間4000円)

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス  
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス  
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: [hanten@ten-no.net](mailto:hanten@ten-no.net)

● 最新情報はこちら ▶ <http://www.ten-no.net/>



今月の

Alert

## 本当に終わりにしたい天皇制

ひたすらに嫌な話が続く中で、沖縄原知事選、辺野古新基地反対の玉城デニー圧勝。沖縄の人々による粘り強い運動が、安倍を追い詰めている。しかしヤマトはどうしてこうなのか、忙しく動きながらも、やはりじっくり考えていくべきだ。

今月も取り上げるべき課題は多いのだが、古くなりつつある杉田水脈衆議院議員の「LGBT生産性なし」発言をめぐり少し触れておきたい。『新潮45』二〇一八年八月号で、杉田議員は「LGBTのカップルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つまり『生産性』がないのです」等々を書き連ねた。杉田発言への批判は噴出・炎上し、その後援護射撃的拍車をかけた特集を組んだ『新潮45』は更に炎上。九月二日、新潮社社長は「謝罪ではない」のコメント付きで「認識不足」等の声明を出した。そして、二五日、「このような事態を招いたことについてお詫び致します」という、誰への謝罪かまったくわからない声明とともに、『新潮45』の事実上の廃刊を発表した。

発言内容もこの幕引きも問題だが、そもそもこの手の発言がこれまで何度くり返されていること自体が問題である。

石原慎太郎元都知事の「女性が生殖能力を失っても生きていくのは無駄で罪です」、いわゆる「ババア」発言（二〇〇一年）。森喜朗元首相の「子供を一人もつくらぬ女性性の面倒を、税金でみなさいというのはおかしい」（二〇〇三年）、柳沢伯夫元厚労相の「女

性は生む機械」発言（二〇〇七年）。麻生太郎元首相の「（自分には）子どもが二人いるので、最低限の義務は果たした」（二〇〇九年）、山東昭子元参院副議長の「子供を四人以上産んだ女性を厚生労働省で表彰することを検討してはどうか」（二〇一七年）。これらは、国や都の上層部にいる者たちの発言である。そのたびに、大きな批判の声が上がり、辞任を迫られたり裁判を起こされたりしているが、発言の主は誠意のない撤回と謝罪、あるいは間違った解釈・報道であると非難し、今回は掲載紙を廃刊させて居直り続けている。提訴された石原を裁判所は、発言は「不用意」と指摘するのみで原告敗訴。司法も同じ穴の住人だ。

どうして、女はこうも「子どもを産むこと」でその価値を計られるのか。

日本国憲法第二条には「皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを継承する」とある。その「皇室典範」第一条には「皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する」とある。世襲制と男系男子。そうやって継承される天皇を、この国と「国民統合」の象徴と憲法は定めているのだ。女が産むことで維持される国の制度。石原、杉田らの発言はむしろ天皇制に依拠しているとさえいえる。

しかし、杉田らが暴言・妄言を発する時、天皇制を意識していたかといえそうでもないかもしれない。天皇制であろうとなかろうと、支配層は私たちを「民力」「国力」「人口」としてカウントし、人権なんて無視だ。「産

めよ増やせよ」政策なのだ。天皇制の日本だけでなく、国家とはそういうものだろう。日本は「産む」ことに至上価値を与える天皇制という、うまい装置を持っているという話である。天皇制とは、そういう国家の思惑にそったイデオロギー装置であることを、多くの人がそろそろ気づいてもよさそうなのだと思う。しかし、杉田発言を批判し、天皇一家を愛する人々がそこに矛盾を感じていないのも事実だろう。少なくない人々は政治家・役人たちに反発するが、天皇制はいらいしい。そこに矛盾を感じないことの問題がこの社会の大きな課題なのだ。

来年五月から皇后となる雅子は、子どもを産まないことで苦汁をなめてきた。同情し応援するのは勝手だが、それでも応援して天皇制を残したければ、石原や杉田たちと同じ穴の住人とならざるを得まい。

安倍は再選し、就任早々の柴山昌彦文科相が「（教育勅語は）今の道徳などに使える」を発言。また繰り返しが始まった……。今月二三日、政府は「明治一五〇年」記念式典を開催。政府はどうあっても我が道を行くだけだ。だけど、私たちもやる。二二日は政府式典反対デモだ。二五日には安倍靖国参拝違憲訴訟控訴審判決もある。「即位・大嘗祭違憲訴訟」も準備が進んでいる。反戦・反基地・反差別の行動も呼びかけられている。一月は「終わりにしよう天皇制」の集会。チラシ等お見逃しなく！そしてみんなで出かけよう。本当に終わりにしたい。

(桜井大子)

## 裏切り者と英雄のアイコン

この夏三九年ぶりに『暗殺のオペラ』を劇場で見た(ベルナルド・ベルトルッチ監督／一九七〇年／於・東京都写真美術館)。舞台は六〇年代のイタリアの架空の田舎町。来訪した主人公は、一九三六年に起きた父親の暗殺の真相に迫ろうとする。町には父親の名を冠した通りや公共施設、反ファシズムの英雄としての胸像も建つが、年老いた住民たちは事件の究明を阻む。最後に彼は、暗殺は父親自身が計画し、同志たちの手で実行されたという証言にたどり着くが、それはこの町の誰もが知る暗黙の了解事項だった。

初めて見て圧倒された甘美な映像による謎解きが、今回は妙に生々しい戦後史への問題提起に思えてきた。住民を巻き込んだ大芝居によって生まれた英雄神話が、抵抗グループだけでなく、ファシスト支持者だった大地主にとつてすら、共通の「戦後」に繋がるための纽带としてあるからだ。

帰り道、かつての風情をなくしたケバいアメリカ橋が見えたとき、嫌な予感が。この国の戦後のスタート地点にはどんなアイコンが設置されていたのだろう。まさかあの、軍服のノッポとチョビ髭の写真？ やめてくれ、ヴィットリオ・ストラローロのカメラワークにもうしばらく酔っていたいんだから。

(捨てられし猫)

## 歴史認識問題を無視するマスコミ

都議会九月議会で東京五輪「人権」条例提出。九月二六日の共産党代表質問で小池都知事が取りやめた関東大震災朝鮮人追悼文に対し聞かれ、小池都知事は以下答弁した。

「関東大震災におきます朝鮮人虐殺に関してでございますが、この件はさまざまな内容が史実として書かれていると承知をいたしております。何が事実かにつきましては、これまで申し上げてきたとおり、歴史家がひもとくべきだと考えておりまして、私は東京都知事として、東京で起こった甚大な災害と、それに続くさまざまな事情で亡くなられた全ての方々に対しまして、哀悼の意を表するところでございます。」

小池都知事は関東大震災並びに都内戦災遭難者慰霊大法要で犠牲者全てに追悼の意を示していると言うが、朝鮮人犠牲者追悼文にあった「多くの在日朝鮮人の方々が、いわれのない被害を受け、犠牲になられた」という事件は、わが国の歴史の中でも稀に見る、誠に痛ましい出来事でした」旨の記載はない。

施設利用制限の幽止めとなる審議会は知事の意向が強く反映される仕組みであり、この「人権」条例がどう利用されるか推測できる重要発言を報道しないマスコミ。

私たちはこういう時代に生きている。(宮下守)

## 祭だ！御輿だ！天皇制だ！

隣町に買い物に出かけて祭と遭遇した。駅前のロータリには、すでにいくつもの御輿が点在している。御輿の集結場なのだ、と思いつながら商店街に入ると、前方から笛や太鼓とあの独特のかけ声も聞こえてくる。なんだ、まだ終わっていないかったのか……。

いつのころからか、この空気に恐いものを感じるようになっていた私は、早くやり過ぎそうと歩きを速めたが、御輿が近づいてくると狭い商店街は息苦しいほど人で埋まり、自由に歩けない。御輿を担ぐ人々の顔も、上下に揺れる御輿も、目の当たりに迫り来る。そして目に入ったのが「天皇陛下在位30年奉祝」とかいう御輿からぶら下がる赤い縁取りの白い細長い布。

このあたりにはいったいどれだけの町内会と神社があるのか、驚くほどいくつもの御輿とすれ違う。一度見てしまった白い布。すれ違うすべての御輿にぶら下がっていた。

ねじりはちまきの御輿を担ぎ練り歩く人たちは、天皇奉祝の札も担ぐ。それを眺める人たちの目にも、私が目にしたように「在位30年奉祝」が焼き付く。なるほど、これが日本の形、天皇制なのだ、とあらためて思い知る。伝統・文化という名の天皇制。祭を好きな人は多い。いったいどうすりゃいいのだ？

(橙)

反

天



ジャーナル

# 状況批評

思想・状況・批評

## あらためて裕仁の戦争責任を考える ——オウム真理教元幹部らの死刑執行で

中嶋啓明

(人権と報道・連絡会)

七月六日朝、職場で死刑執行の速報を聞いた。驚いた。旧オウム真理教の元幹部らに対する執行だった。近いと言われていたが、それでもまさかと思った。

刻々と速報が続き、それを現在進行形で実況するテレビの報道に、さらに驚いた。直接的な映像がないだけで、さながら人殺しを生中継しているような報道だった。気分が悪くなった。

「地下鉄サリン事件」をはじめとした一連の事件で死刑が確定していたのは一三人。そのうち七人がこの日、執行された。残る六人の執行は二六日。どんな気持ちですごしたのだろう。

最初の執行の前日、法務大臣の上川陽子は、例の「赤坂自民亭」に参加し、首相安倍らと共に酒盛りに興じていたという。おどましいと言っほかない。

安易に原稿の執筆依頼を受けたものの、私自身は元幹部らと何のつながりもない、一連の事件を継続的に取材してきたわけでもない。そんな自分に何が言えるのかとのためらいは、今も頭から消えない。

旧オウム真理教の信者は、事件に関与していない「末端」の人まですべてが、すさまじい人権侵害にさらされ続けている。彼らは文字通り、日本の国家、社会にとって憲法外存在なのだ。そうした状況については、私もこれまでそれなりに取材を続けてきた。彼らが置かれた状況から、日本の民主主義の欺瞞性が見える。彼らに対する取材を続けてきて、私はそう強く感じている。

そうした立場からここでは、今回の執行を受けてあらためて考えたこ

とを、思いつくままに記してみたい。それでご容赦願いたい。

### 残された多くの「闇」

前置きが長くなった。

今回の処刑に対しては、事件の全容説明が不可能になったと批判が上がっている。

その通りだろう。けれども、心神喪失状態だった元教祖に適切な治療を施し、裁判を再開して語らせるべきだったとの主張に接すると、ちよつと待てよと思う。刑事被告人に認められているはずの黙秘権はどうなるんだと。もちろん、話せるのなら話してほしい。だが、被告人という立場に置かれている以上、供述が強制されることがあつてはならない。

元幹部らがそれぞれ、一連の事件になんらかの形で関与していたのは間違いないのだろう。何も知らず、そのまま教団に残った現在の信者らもその後、一定程度明らかにした事実を前に団体としての関与を認め、果たすべき責任に誠実に向き合おうと苦悩を続けている。

だが、それらを踏まえた上でなお、未だ説明されていない多くのナゾが残されたままであるのは間違いない。

元教祖の一番の弁護団は最終弁論で「各種の鑑定や証拠から、散布されたものがサリンかどうか立証されていないし、被害者らが、サリン中毒により死亡したり重症になったりしたとの十分な立証はなされていない」と指摘していた。



元教祖と「地下鉄サリン事件」は、「リムジン謀議」で結び付けられている。

確定判決は、同事件が起きた九五年三月二〇日の二日前、東京から山梨県上九一色村（当時）の施設に戻る際のリムジンの中で、元教祖の指示で地下鉄にサリンをまく計画が決まり、共謀が成立したと認定した。元教祖の犯罪事実として描かれる構図の核心部分だ。

この共謀は、同乗していた実行犯とされた元幹部の証言をもとに認定された。この元幹部もまた、今回処刑された一人だ。

だが、この元幹部に対する裁判の一审判决では、証言の信用性が疑われ、「リムジン謀議」の成立は否定されていたのだ。「リムジン内においては、いまだに本件（地下鉄サリン事件、以下同）の実行が決定されていない上、被告（元幹部、以下同）に対して本件の現場指揮をとることや、本件の補助をすることなどの指示が抽象的な形であっても何ら示されておらず、被告と元教祖らとの間に共謀が成立したとみるには無理がある」（要旨、（一）内は筆者、元教祖は本文では実名）と。

旧オウム真理教の周辺では当時、一連の事件に関連して多くの不可解なことが相次いだ。

最たるものは、警察庁長官狙撃事件だろう。この事件の捜査は、多くの誤認逮捕の被害者を生みながら結局、時効を迎えて終わった。その過程では、催眠状態に陥らされた元信者を名乗っていた警察官が、自分が狙撃したとしてその状況を再現し、それがテレビで放映されるなどといった、不気味な「闇」の存在をうかがわせるに十分な事実もあった。この警察官が、その後どうしているのか不明だ。挙句、警視庁は何の証拠もないまま、旧オウム真理教信者の犯行だと断定する見解を公表して批判を浴びた。この事件では今も、無関係な別の人間の関与が、根強くささやかれ続けている。

同様に一連の事件の最中、東京の教団施設の前で当時の最高幹部が、『暴力団』関係者によって刺殺された。この男性に犯行を指示したとし

て殺人罪で起訴された元『暴力団』幹部の男性は、当初は主犯格と目されているが、実際には無実だったことが裁判で明らかになった。男性はそれからまもなく、別の企業恐喝事件で容疑を掛けられ、否認しているにもかかわらず、何度も再逮捕が繰り返されている。

元教祖の裁判は、一審の審理だけで終わった。控訴趣意書の提出をめぐり、弁護側と裁判所が合意して約束した期日の前日にいきなり、東京高裁は趣意書の未提出を理由に控訴を棄却、裁判を打ち切った。よほど事実が明らかになるのを嫌ったのだろう。

公安警察や自衛隊の謀略機関などの関与がちらつく一連の事件の不可解さは、挙げればキリがない。

元教祖の弁護団は今回、「リムジン謀議」を否定する別の同乗者の証言を得て再審請求していた。処刑された計一三人のうち一〇人が再審請求中。先の「リムジン謀議」を証言した元幹部も、再審を請求したばかりだった（再審請求中の執行については、あらためてその違憲性、違法性を問う裁判が起こされている）。

再審請求の過程で、先のような闇の一端に再び光が当てられるのは許されない。それが権力の意味だったのではないかと疑わざるを得ない。

### 「平成の事件は平成で」

さて、天皇制とのかかわりについても触れなければならない。

今回の執行について、明仁がいつ、どのような形で知ったのか。これはもう恐らく、まさに真実は闇の中というほかない。表に現れた事実経緯だけを記しておこう。法相の上川は執行命令書にサインした翌日の七月三日、皇居・宮殿で予定された昼食会に検事総長らと共に招かれていた。ただ、この昼食会は、明仁の体調不良で延期された。二回目の執行の前日二五日には、検事総長ら認証官の任命式が行われている。

同時期に同一事件での執行数では大逆事件以来だといわれる。今回は

計一三人。他方、一九一〇年の大逆事件では一二人だった。

一回での処刑人数が大量であるうがなかるうが、命を断たれる側の死刑囚にとって、その残酷性に変わりはない。それを踏まえた上で、大逆事件との相似性についても、いささか無理やりの感はあるかもしれないが触れておきたい。

大逆事件で一二人が処刑されたのは、元号で言うところ、明治の四四年。明治天皇の最晩年の時期に当たる。糖尿病が進行し、歩行に困難をきたすほどに体調を崩していた天皇の代替わりも、支配層の間では視野に入っていただろう。大逆事件は、民衆の間に高まりつつあった社会主義への期待に冷や水を浴びせようと企図し、フレイムアップされた事件だったとされる。

一方、安倍政権の周囲には常にスキャンダルの腐臭が漂い、左翼・リベラル層から攻撃されるだけでなく、足下の右翼・反動層からさえも離反の動きが常にささやかれる。明仁、美智子は左翼に取り込まれたとして、「醜の御盾」であるはずの右翼・天皇主義者たちからさえ愛想をつかされ、頼りない次期天皇・皇后にも不満の声は絶えない。自分たちの希望を託せるはずだった秋篠宮「家」までも、眞子の結婚相手をめぐる醜聞などがそうした状況に追い打ちをかけている。

代替わりの過程の中で、支配層、支配体制に揺らぎが生じ、それに対する不信感が、民衆の間に広がり続けるかもしれない。一度、権力の怖さを見せつけておいた方がいい。さて、どうするか。目の前には利用できる格好の材料がある。何せ、彼らは「国民の敵」なのだから。今回の執行の背景事情として、あながちありえない想定ではないだろう。

メディア上では、「政府関係者」が「平成の事件は平成のうちに」と語っていたなどと、まことしやかに報じられた。

破壊活動防止法の適用「失敗」とそれを受けた団体規制法の制定等に象徴されるように、一連の事件を境に、治安管理体制の再編、強化は一段階を画した。一連の事件は、「平成」史の中で、ある種のターニング

ポイントとして位置づけられるものだったのだ。

代替わりから東京五輪にかけて、次代の天皇制が迎える国家イベントを目前にして、治安管理体制の再編、強化は今後、より高次の段階に進める必要がある。ならばその前段階には、一応の区切りをつけておかなければならぬ。「平成の事件は平成のうちに」とは、そんなことを意味しているのだろうか。

## 刑事責任と政治責任

最後に少し。私は普段、日本国家と旧オウム真理教、天皇と元教祖の相似性について、積極的に語ることは控えている。事実をよく知らないからだ。が、そもそも基本的に、本質的な違いもあるように思う。一方は国家そのもの、死刑を執行する側であり、他方は国家内の存在で、いざとなれば今回のように処刑される側にすぎないからだ。刑事法を適用する側とされる側の違いだ。ただ、表層的な外形事実の相似性を踏まえた上で、考えなければならぬ論点もあるように思う。

一番東京地裁での最終弁論で、元教祖の弁護団は要旨、次のように述べていた。

「被告自身には、宗教家・教祖としての責任があるが、それは刑法上の『謀議責任』とはまったく別のものだ。『謀議』に関する証拠に基づいて、二つの責任を峻別していくことが、審理の本来の主題であったはずだ。しかし検察官は、被告が宗教家であるという事実を切り捨てることによって、二つの責任という主題を初めから切り捨てた」。

刑法上の責任と、組織の長としての政治責任は峻別されるべきとの趣旨だろう。

裕仁の戦争責任を考える上でも、避けて通ることのできない視点が示唆されているように思う。今後とも考え続けていきたい。



## 『ブラックボランティア』 本間龍（角川新書） —— 八月の太陽のもとで

暗黒聖闘士（おことわりリンク）

「あなた方は、八月の暑さをしらないだろう。照りつける太陽が体をむしばみ、頭を混乱させ、たまたかう気力などまったくしなわせてしまうことをしらないだろう。」——『八月の太陽を』（乙骨淑子、理論社）

九月末から東京オリパラのボランティア募集が始まっている。大会ボランティア八万人、都市ボランティア三万人の計一十二万人。『ブラックボランティア』（本間龍、角川新書、二〇一八年七月）は、開催費の暴騰、新国立競技場建設を巡る混乱、選手村用地の不当譲渡疑惑、招致活動における賄賂疑惑などを列挙し、「招致時に叫ばれた『復興五輪』のかけ声は、建設業界を中心に、五輪特需に沸く東京への人手と資材の集中を生み、もはや被災地の復興を遅らせていることが明らかになっている」と指摘する。

そして「その中で、私が最も大きな問題と考えているのが、本書で扱う『無償ボランティア労働搾取』である」と述べ、これを「酷暑下で展開される未曾有の『やりがい搾取』」と喝破し、組織委員会や東京都が募集する無償ボランティアの問題点を、客観的なデータや組織委員会とのやり取りを交えながら訴える。その他にも多くの興味深い論点はあるが、私が惹かれたのは、第二章「史上空前の商業イベント」で紹介されているIOCや組織委員会による「五輪ビジネス」についてである。

五輪の商業化が一気に進んだのは八四年のロス五輪以降という話は、同大会を取材したスポーツ

ジャーナリストの谷口源太郎さんの幻の名著『日の丸とオリンピック』（文藝春秋、一九九七年）等に詳しいが、総経費三兆円以上といわれる今回の東京五輪も巨額のスポンサー料金とテレビ放映権料によって支えられている。世界中で五輪マークを使用できる「ワールドワイドパートナー」（WWP）になるには四年契約で年間一〇〇億円程度と言われるスポンサー料をIOCに支払う必要がある。WWPは一業種一社のみで、現在一三社がIOCとWWP契約をしており、トヨタ、パナソニック、ブリヂストンの三社が日本企業、他にアメリカ六社、スイス、フランス、韓国、中国が一社ずつ。この他に国内組織委員会には、国内スポンサーからの収入がある。〇八年北京大会の一四六〇億円、一四年ソチ冬季大会の一五六〇億円から、二〇二〇東京五輪では五〇社四〇〇億円以上に膨張（詳細は非公開）。企業はボランティア精神ではなく、もうかると考えてスポンサー料「広告代を払う。著者は、巨大商業イベントになり果てたオリパラのボランティアは有償とすべきであり、それが無理なら電通やスポンサー企業が社員を派遣すればスツキリすると訴える。

オリパラビジネスで商品価値を生むと考えられるのは「トップアスリート」とよばれる現代のグラディエーター（奴隸剣闘士）による命を削る血生臭い闘いであり、命の危険さえ叫ばれる酷暑下の無償労働でそれを支えるのが「ブラックボランティア」と呼ばれる一十万ものオリパラ奴隷たちである。本書を

はじめ「ブラック」という呼称でネガティブさを表現することが流行りのようだが、民衆の闘いの歴史を振り返れば、「ブラック・パンサー」や「ブラック・ライヴズ・マター」など、むしろ肯定や抵抗的な意味合いでの呼称が常識。昨今の「ブラック」呼称の風潮は、批判対象の五輪に最初から倫理面で負けていると言えなくもない。それを意識してかどうかは分からないが、著者は「おわりに」のなかで、アメリカの黒人文学者のミリ・バラカ（リロイ・ジョーンズ）の「奴隷は、奴隷の境遇に慣れすぎると『自分の足をつないでいる鎖の自慢を始める』という」という言葉を紹介している。

これを読んで思い出したのが、史上初めての黒人奴隷らの蜂起によって奴隷制を廃止したハイチ革命を描いた『ブラック・ジャコバン』（C・L・R・ジェームズ、大村書店）。そして本書評の冒頭で紹介した一句は、このハイチ革命を描いた児童文学『八月の太陽を』の一節で、黒人奴隷の指導者トゥサンが、迫りくる強大な英軍を前にして仲間語ったセリフだ。トゥサンは続けて言う。「われわれは、もっと暑さのきびしい八月のある日に総攻撃をかける。イギリス軍は、暑さと、とつぜんの総攻撃に、あわてふためいて逃げてゆくのだ。そしてふたたび姿をあらわすことはあるまい。」

二〇二〇年の八月の太陽のもと、ブラックボランティアやブラックアスリートらのオリパラ奴隷たちと団結して蜂起せよ。



# 反天連パンフ『A i e r t!!!「代替わり」状況へ』

高橋寿臣

## 紹介

今年の七月末に行われた、P P 研の連続講座「平成代替わり」で、私も報告者の一人だった。私が担当したのは「昭和Xデー」に対する反対運動の体験・経験について。最後の方で、これらと比べても、現在進行形の「平成代替わり」に対するたたかいは、様々な点で困難である（周知のことではある）ことを述べた。とてもあの時のような人々の結集はできないだろうということなのだが、では、どうするのか、どう考えるのか、ということになる。私が最後に述べたのは、「（極）少数派たらざるを得ないのは以前から分かっていたこと、反天の闘いは、どんなに小規模になろうが必要なデモをやり続けること、何が問題なのか、たえず、また、ポイントごとに、声明やアピールを発し続けること、それが長い目でみても意義・意味を持つであろうこと……」というようなことで、結局、「現在の反天連がやっていることがまったく正しい」と結論づけた。まあ、「内輪ほめ」かも……。

今年八月一五日に発行された本パンフは、反天連の久しぶりのパンフ。最新のパンフで、機関紙「A i e r t」の二〇一六年七月号から一八年四月号まで掲載された「主張や見解」、天野恵一の連載「マスコミじかけの天皇制」が収められたものである。初めの数か月は、「アキヒト退位表明」から始まった「代替わり過程」への衝撃が、色濃く反映されている。にもかかわらず、このことの意味するもの、問題点を的確に指摘しているのは、「さすが」である。アキヒト（＋ミチコ）の目指した「再定義さ

れるべき象徴天皇制」と安倍右翼政権の思惑の違いがリアルにわかる。退位＝禅譲・譲位の自由権を確保しようとする（皇室典範改正？）アキヒトらと、憲法上の「建前」等をもって「一代限りの特例法」で対処しようとする政府。そのいわば「せめぎあい」の中で、実際の「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が制定（挙国一致!）されていく。一つの肝は、特例法でありながらアキヒト以降の「退位・禅譲」も可能としている点であろう。「象徴天皇制は私たち（皇室）のもの」という「意向」に、安倍らが「妥協」せざるを得なかった、と推測される。背景にあるのは「退位意向」に対する「多数の国民の同情・共感」がある、としていることだ。このことはある意味、アキヒトの目指したもので、まるでどこかの商店か同族会社の高齢の社長が引退して「ご隠居」となり、息子にその地位を譲る、という話であるかのようにして、庶民的な「共感」を得ていくことに成功した、といえる。政治的権能は有していないとしても象徴天皇は現憲法に規定された「国家機関」である。従って、退位・禅譲は表明したアキヒトの政治意志である。そのことにより新たな法律が創られるということは明確な「政治権限の行使」で、「憲法違反」。その問題をクリアする手段として使われているのが「国民多数の共感（総意ではないぞ）」で、これは象徴天皇制を永續させようとする、最強の武器、である。本パンフでは、ここの違憲性や問題点を暴き出しているが、ほとんど「黙殺」される極少数派。さらに「国民の共感」は、安倍政治を批判する人々に、それに対抗しているアキヒト・ミチコへの期待・

賛美という倒錯を、広範に生み出している。

本パンフ全体を通しての、もう一つの大きなテーマは、反天皇制運動が直面している「民主と人権諸運動」における「代替わり問題」の無視・軽視、反天課題「持ち込み」への警戒感、アキヒト賛美傾向等々をめぐってである。昭和Xデー闘争のような広がりをもちえない（だろう）という、予測の根拠でもあるが、ここは要するに「原点に立ち返って」構想と展望を考えていく、ということしかないと思う。まあ「少数派根性」といわれてしまえばそれまでだが、反天皇制運動は、戦後日本社会において大きな大衆運動として展開されてきたわけではない。あの昭和天皇に対してさえ、それなりの大衆運動らしくなったのは、「Xデー」が近づいた八〇年代で、反天連の活動を基盤としたものであった。象徴天皇制というこの扱いにくい「政治制度」に切り込んでいった反天連、天野の努力は、今日も生き続けている。

私たちは「民主主義に天皇制はいらない」という主張を獲得し、その根拠の一つに「貴族あれば、賤民あり」という古くからの反差別思想があることをアピールしてきた。これが心ある人々に受け入れられる機会は、きつと広がる。このパンフで示し続けてきたような、主張・アピールを、今後も続けていくこと。以前にもまして役に立っていない（生産性のない！）私ですが、できる限りのことはやり続けます。

\*九月三〇日、沖縄で玉城デニーが勝ってくれた。奮闘を続ける沖縄民衆に敬意を表します。



みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく 101

## 日米首脳会談共同声明から見抜くべきこと



移民や難民の入国規制や禁止を求めて欧州各国に台頭しつつある排外主義的な政治勢力を、正しくも「極右政党」と表現するメディアは、日本に成立した今次安倍政権を「極右政権」と名づけて報道しなければならないのか。「日本会議」と「神道政治連盟」に加入している政治屋たちが居並ぶ閣僚名簿を見て、かつ彼（女）らのこれまでの発言を思い起こして、つくづくそう思うのだが、こんな問題提起をしても、虚しさを感じるばかりの、政治・社会・メディアの状況が続いている。だが、これが偽りのない日本社会の現状なのだ。私たちは、ここで考え、発言し、叫び、跳び、転がり、駆け、座り込み、動き回るしかないのだと覚悟して、久しい。

衝くべき問題は、いくつもある。ここでは、去る九月二七日に行なわれた日米首脳会談が孕む問題に触れよう。共同声明の発表を受けて、日本の報道では「日米物品協定交渉入り合意」（九月二七日毎日新聞）、「日米、関税交渉入り合意」（同日朝日新聞夕刊）などの見出しが躍った。詳しく読むと、記者会見で日本国首相は、「今回のT A G（物品貿易協定）は、これまで日本が結んできた包括的なF T A（自由貿易協定）とは全く異なる」と強調している。これは、従来から、日米二国間

のF T A交渉を行なうことはあり得ないと否定してきた首相の立場に即せば当然のことだが、しかし、交渉翌日の新聞は「事実上のF T A」（毎日新聞）、「実態F T Aに近い」（朝日新聞）との見出しを付したように、マスメディアによっても問題の本質は疾うに見抜かれていたのである。

一〇月四日、東京新聞が共同声明のホワイトハウス発表の英語版および、在日米国大使館による仮翻訳と日本政府訳を並列し、食い違っている問題点を指摘した。私自身も原資料に当たって、検討してみた。すると、「東京」紙も指摘しているところだが、日本政府が公表した声明文で「日米物品貿易協定（T A G）」となっている個所は、United States-Japan Trade Agreement on goods となっており、使用されている大文字と小文字の関係性から言えば、goods は「Trade Agreement」と同格の位置にはないから、「物品貿易協定」と熟語的に翻訳することには無理があることがわかる。英語本文では「T A G」の略称も用いられてはいない。しかも、on goods の後には、as well as on other key areas including services、と続っており、「物品」と「サービスを含めた他の重要な分野」を同格と捉えた表現になっていることがわかる。ここをこまかして、首相の従来の言動にぎりぎり合

わせた翻訳文にするのだから、政府と官僚たちは、森友・加計問題で駆使した文書捏造技術にさらに磨きをかけるつもりなのだろう。

だが、この翻訳「技術」には既視感がある。一九九九年、新たな国際情勢の下で日米両政府が「防衛協力のための新ガイドライン」について協議していた。まとめられたガイドラインの正文（英語）と、政府から発表された日本語訳を読み合わせると、微妙だが、明らかなズレが見られる。ふたつの文章は実際には厳密な対応関係にはなく、日本語文は、語の内容から「軍事色」を消すことに腐心していると私には思えた。いざ「周辺事態」が発生した時に自衛隊は米軍に「物品および役務を提供」する「後方支援」に従事することになるにもかかわらず、日本語文からは「戦争の匂い」が消えているのだ。この日米協議の場に出席していた防衛庁・陸幕調査部一等陸佐、山口昇氏（現在は防衛大学校教授で、「軍人スカラ」と呼ばれている）が公開の場で講演するということで、当時聞きに行った。氏の話を直接聞いても、ふたつのテキストを読んだ時と同じ感想を持ったので、私は「ガイドラインがまぎれもない戦争マニュアルであること」を隠そうとしているのではないかと質問した。見解の相違で、そんなつもりはないと氏は断言した。だが、日本語文は英語正文からの翻訳ではなく、討論を経てふたつの言語で同時に起草したことは認めた。二国間の共同声明や協定が、こんな風に処理される場合もあるようだ。現在の権力者たち（政府+高級官僚）の論理と倫理の水準に照らして、今回の日米共同声明を厳しく解読すべきだろう。（一〇月六日記）

マスコミの  
天の制 27

# 天皇が「神格」をえる「カミ」となる」儀式をめぐる

——〈壊憲天皇明仁〉その25



九月一日・二日は、再稼働阻止全国ネットワークの全国相談会に参加。この茨城県（水戸市）で持たれた第二回「全国相談会」は首都圏老朽・被災原発の二〇年延長を許さない闘いを、さらにどう広げていくかを集中的に論議する場となった。もちろん、全国の原発の声を合流させることで再稼働をストップさせる多様な闘いを展開するため、北海道から四国、九州まで原発立地の闘いの情報交流という持続されている基本的作業も、キチンと果たされながらである。論議は、時間的に不足という状態はいくわらずだが、発言者はほぼすべて、整理したレポートを提出すみで、参加者はそれを手しながら話を聞くというシステムも、うまく定着し、実にスムーズに報告と論議が進行するようになっていた。そして報告内容も、自分の足もとの原発が、他地域の原発と、どういう共通した、あるいは関連した問題をかかえているかを考えながらのレポートだ。司会をしながら、私はその点も実感した。フクシマ（3・11）は忘れられつつあるというマスコミに流れる情報とは反対に、そこには、したたかに深化し拡大しつつ持続している原発運動の実態が、力強く示されていた。もちろん、次の大事故まで、もうあまり時間がないのでは、というリアルな危機感こそがそのバネになっているのだろう。

九月二三日・二四日は神奈川県（平塚市）で、反天皇制運動のグループの「合宿」に参加。「代替り状況」下で、より広く各地のグループが交流す

べくつくりだされ、今、「新元号反対署名」に取り組んでいる人たちの集まりである。そこでのテキストは『季刊ビートルズ・プラン』の八十一号。私の責任編集の『象徴天皇陛下』万歳の《反安倍（リベラル）》でいいののか。特集。正直、動きすぎてヘロヘロ、ドクターストップ状態であったが、参加。それでも、活発な討論が聞けて、楽しい集まりであった。

〈平成天皇制〉への忠誠競争をくりひろげだしている〈反安倍政権（リベラル）〉の代表的イデオログの一人、島蘭進の最近の発言をここでは取り上げたい（島蘭については北野誉がその雑誌で、『神聖』か『象徴』か、いかなる『国家神道』かというタイトルで、的確な批判を書いている）。八月二十五日の『毎日新聞』に、実に奇妙な記事が載った。

「来年5月に即位する新天皇が五穀豊穡（ほうじょう）を祈る皇室の行事『大嘗祭（だいじょうさい）』について、秋篠宮さまが『皇室祭祀（さいし）』に公費を支出することは避けるべきではないか」との懸念を宮内庁幹部に伝えられていることが関係者への取材で判明した。大嘗祭は来年11月14日から15日にかけて皇居・東御苑での開催が想定されている。政府は来年度予算案に費用を盛り込む」（傍線引用者）。

その記事は、今年の天皇家の内廷費（私費）といわれている）は三億二四〇〇万円であるが、「平成」の時は総額二億五〇〇〇万以上かかってお

り、これ以上はまちがいないものを「内廷費で実行できる規模にできないだろうか」と話しているというのだ。

どこが奇妙か？

「秋篠宮さまは、新天皇が即位すると、皇位継承順位第1位の皇嗣となる。同庁幹部は秋篠宮さまの懸念について、毎日新聞の取材について『承知していない』としている」（傍点引用者）。

取材したら、知らないと言われたと書きながら、「秋篠」は「幹部」にこう言ったと大々的に記事にする。普通ではありえない。「生前退位」に向かう天皇家の〈国費の無駄遣いに心をいためる天皇家〉という、国民向けイメージアップの政治がそこにある。こんなあからさまな国政介入。憲法が禁じている発言ゆえに「秋篠」の言葉にして、知らない振りをしてリークしてみせたのだ。そこにある有識者コメント。「皇嗣」となる方の率直な意見として歓迎したい。大嘗祭に公的な費用が使われることは、国の宗教的な活動を禁じる憲法20条に抵触する恐れがあり、本来好ましくない。島蘭の言葉である。

宮廷費（公費）とされている）だろうが内廷費だろうが、どちらも税金という公費だ。そして国の象徴と位置づけられている男が（神格）をえる（カミ）になる皇室神道としては最重要な儀式が（私事）と形式的に位置づけられようと、国家的公共性がないわけがあるまい。それは憲法二〇条（政教分離原則）破壊の行為だ。この原発被曝列島の「平和」を讀えながら、新天皇は（カミ）になる。「国家神道」は、さらにこのように象徴天皇の中を生き続けるのではないのか？ 島蘭宗教学はどうしてこんなあたりまえの事実を無視するようになったのか？

# 日本国憲法

8月31日～9月30日

【8月31日】

宮内庁概算要求◆宮内庁が、2019年度予算の概算要求を発表。皇居・御所の改修費など代替わりの費用は19億円を計上。代替わりに伴う体制整備のため、職員36人の増員を求める。これにより、翌年5月以降の側近部局は、退位後の明仁、美智子を担当する「上皇職」が65人、新天皇一家の「侍従職」が75人、皇嗣となる秋篠宮一家の「皇嗣職」が51人となり、新天皇一家が移り住む皇居・御所の改修費として7億円を盛り込む。要求総額は210億円で、18年度当初予算比1:4%減だが、年末にまとめる予算案には事項要求分が上積みされ、明仁、美智子が皇太子一家と入れ替わりで住む東宮御所の改修費は、20年度予算に盛り込む予定のほか、秋篠宮邸は、21年度までに33億円程度をかけて増改築する方針で、今回はうち一部の2億円を計上したと報道。ほかに皇室ゆかりの美術品などを収蔵、展示する「三の丸尚蔵館」の建て直し費用の一部7億円を盛り込む。

【9月1日】

徳仁、雅子、愛子◆徳仁が、静養のため滞在していた栃木県那須町の那須御用邸付属邸から帰京。

秋篠宮、紀子◆1923年の関東大震災から95年となり、東京都墨田区の都立横網町公園内の慰霊堂で営まれた犠牲者を

追悼する大法要に出席。

【9月2日】

佳子◆茨城県つくば市にあるつくば国際会議場を訪れ、世界各国の高校生らがプログラミング技術を競う大会「第30回国際情報オリンピック」の開会式に出席。

新元号◆政府が翌年5月1日に改める元号に關し、「明治」「大正」「昭和」「平成」の頭文字をアルファベットで表記した「M」「T」「S」「H」との重複を避ける方向で検討していることが分かったと報道。

【9月3日】

美智子◆東京都千代田区の紀尾井ホールを訪れ、翌年で日本とオーストリアが外交関係樹立150年を迎えるのを祝うバイオリンコンサートを鑑賞。

雅子、愛子◆静養先の栃木県那須町の那須御用邸付属邸から帰京。

【9月4日】

明仁、美智子◆東京都港区にある森美術館を訪れ、特別展「建築の日本展」を鑑賞。

明仁◆宮内庁が、7月の西日本豪雨の被害を受け、各国の元首らから送られた見舞いの電報に対し、明仁が謝意を示した電報をそれぞれ返信したと発表。

【9月5日】

明仁、美智子◆「実務訪問賓客」として訪日している南米エクアドルのモレノ大統領夫妻を、皇居・御所に招き懇談。

徳仁◆7日からの初めてのフランス「公式訪問」を前に東宮御所で会見。自身が目指す次世代の天皇像について、明仁の考えや活動の在り方を基礎とした上で「日本と世界の人々の幸せを祈りつつ、自分に何ができるかを常に真剣に考えていきたい」。「国際親善」のための外国訪問について「皇族が果たすべき役割の中で重要な柱の一つ」。

【9月6日】

明仁、美智子、紀子、悠仁◆悠仁が12歳の誕生日を迎えたとして、明仁、美智子にあいさつをするため、紀子と共に皇居・御所を訪れる。半蔵門から皇居に入る。

【9月7日】

明仁、美智子◆最大震度7を観測した北海道の地震で多くの被害が出ていることを受け、宮内庁の河相周夫・侍従長を通じて、北海道の高橋はるみ知事に、犠牲者に対する「悼み」と、被災者への「見舞い」の気持ちを伝え、災害対策に従事する関係者に対する「ねぎらい」を伝えたと報道。

徳仁◆フランスを初めて「公式訪問」。当年は両国間の修好通商条約締結から160年に当たるとして、フランス側は夫妻での訪問を招請したが、宮内庁が雅子の負担を考慮し、同行を見送ったと報道。

【9月8日】

徳仁◆フランス南東部リヨン近郊で日本人の園児や児童、生徒らが通う補習授業校を訪問。

秋篠宮◆ラグビーの2019年ワールドカップ(W杯)日本大会の名誉総裁として、

秋篠宮が就任することが関係者への取材で分かる。

【9月9日】

徳仁◆フランス・ブルゴーニュ地方サントネのワイナリー「ドメヌ・フルーロ・ラローズ」を訪れ、ブドウ畑やワインの貯蔵庫を視察。夜、内務大臣主催の夕食会に出席。

彬子◆故寛仁の長女彬子がトルコを訪れ、最大都市イスタンブールでエルドアン大統領と会談。

【9月10日】

美智子◆東京都港区にあるバナソニック汐留ミュージアムを訪れ、陶芸家河井寛次郎の作品などを集めた特別展を鑑賞。

徳仁◆フランス・リヨンの南東100キロにあるグルノーブルで、欧州を代表する科学分野の最先端研究拠点を視察。

承子◆故高円宮の長女承子が、勤務する日本ユニセフ協会の業務で東ティモールを訪問するため、成田空港を出発。

秋篠宮◆ラグビーの2019年ワールドカップ(W杯)日本大会組織委員会が開いた理事会で、大会の名誉総裁に、秋篠宮が就任することが報告される。

【9月11日】

明仁、美智子◆西日本豪雨の被災者を見舞うとして、被害が甚大だった広島、岡山、愛媛の3県を訪問することが閣議で報告される。

徳仁◆フランス南東部のリヨン空港から政府専用機でパリに到着。パリ中心部のアンバリッド(廃兵院)で歓迎行事に出席。パリ近郊の日本人学校を訪問。国民議会



副議長主催の昼食会に招かれ「長い歴史の中で両国民が紡いできた強固な友好関係を実感しております」とフランス語でスピーチ。

代替わり◆政府が、明仁の退位と新天皇の即位に伴う一連の儀式の詳細を決める「式典委員会」を10月に設置する方向で調整に入り、トップは首相が務め、各儀式の会場や参加者数などを定めた大綱を策定すると、政府関係者が明らかに。

【9月12日】  
明仁、美智子◆最大震度7を観測した地震で甚大な被害を受けた北海道に対し見舞金を贈る。

明仁◆皇居・生物学研究所の隣にある田んぼで、恒例の稲刈りをする。

徳仁◆パリで日本にゆかりのあるフランス人らと懇談。「ネッカー子ども病院」を訪問。

【9月13日】  
明仁、美智子◆宮内庁が、西日本豪雨の被災者を見舞うためとして、予定していた広島、岡山両県訪問を、14日に延期すると発表。

徳仁◆日仏友好160周年に当たり、フランス・パリ近郊のベルサイユ宮殿でマクロン仏大統領と宮殿で約40分間にわたって会見。宮内庁によると、大統領が「環境面でも日仏間の協力を推進したい」と話し、徳仁が賛同したと報道。会見後、大統領と共に宮殿のオペラハウスで能公演「幽玄」を鑑賞。マクロン大統領夫妻主催の晩さん会に出席し「両国民の絆がますます深まることを期待している」と

あいさつ。

【9月14日】  
明仁、美智子◆西日本豪雨の被災者を見舞うためとして、被災地の岡山県倉敷市に空路で入る。羽田空港から特別機で岡山空港に到着、陸上自衛隊のヘリで倉敷市に移動。甚大な被害が出た真備町地区の災害対応拠点となっている真備総合公園を訪問。公園内の体育館で待ち受けた遺族や被災者らと懇談。これに先立ち真備町地区を見渡す堤防から現地を視察。岡山空港に向かう陸上自衛隊のヘリコプターに乗り、夕方、羽田着の特別機で帰京。

徳仁◆パリで同行記者団の取材に応じ、日仏両国の友好関係を「次の若い世代の人たちにもぜひ引き継いでいってもらいたい」と述べる。12日に会見したマクロン仏大統領の印象について「若いリーダーとして、どういうふうな国を導いていったらいいかということ真剣に追い求め、諸外国との関係についても非常に真剣に考えている」。パリの国立シヤイヨー劇場で、日本をイメージしてエッフェル塔に日の出などを投影する点灯式に出席。

【9月15日】  
徳仁◆羽田空港着の政府専用機で帰国。帰国後「私の訪問が、今後のわが国とフランスの間の一層幅広い分野での交流のさらなる発展に貢献し、両国の友好親善と協力が、美しい『絹の着物』へとさらに進化していくことを期待しています」。

【9月16日】  
徳仁、紀子◆東京ビッグサイト（東京都江東区）で開かれた「国際水協会世界会議・

展示会」の開会式に出席。

【9月18日】  
明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が20日に広島、愛媛両県を日帰りして訪れ、西日本豪雨の被災者を見舞うと正式に発表。20日は愛媛県だけの予定だったが、13日に組まれていた広島県訪問が悪天候のため延期になり、予備日の14日にもかなわなかったため、愛媛訪問に併せて実施することになったもので、現地の移動では陸上自衛隊のヘリコプターを使う。

信子◆故寛仁の妻信子が、イタリア・ミラノ大で開催される伊日研究学会の2018年次総会開会式への出席などのため同国に向け、成田空港を出発。

【9月19日】  
久子、絢子◆故高円宮の三女絢子と日本郵船社員の守谷慧の結婚式を行う10月29日の期日を、守谷の使者が絢子に正式に伝える「告期の儀」が、東京・元赤坂の赤坂御用地にある高円宮邸で催される。守谷の使者として、親族で元国立国際医療研究センター病院の近藤達也・病院長が宮邸を訪問。宮内庁によると、応接室で故高円宮の妻久子が立ち会う中、近藤病院長が期日を告げ、絢子「ありがたうお受けいたします」。

【9月20日】  
明仁、美智子◆宮内庁が、西日本豪雨の被災者を見舞うためとして、明仁、美智子が予定していた広島、愛媛両県訪問を21日に延期すると発表。

秋篠宮、紀子◆アジア文化の発展に大きく寄与したとして個人や団体を表彰する

ため福岡市で開かれた「第29回福岡アジア文化賞」（福岡市など主催）の授賞式に出席。

【9月21日】  
明仁、美智子◆西日本豪雨の被災者を見舞うためとして、空路日帰りして愛媛県西予市と広島県呉市を訪れる。

徳仁、雅子◆「敬老の日」にちなみ、東京都墨田区にある高齢者施設「東京清風園」を訪れ、施設を利用する高齢者と交流。眞子◆東京都中央区の日本橋三越本店を訪れ、日本伝統工芸展の授賞式に出席。

【9月23日】  
「秋季皇霊祭・神殿祭」◆安倍晋三首相が、皇居で行われた「秋季皇霊祭・神殿祭の儀」に参列。

【9月24日】  
久子◆愛知県で22日から開催されていた知的障害のあるアスリートのスポーツイベント「スペシャルオリンピックス」の国内大会の開会式に出席。

【9月25日】  
明仁、美智子◆最大震度7を観測した北海道の地震の被災地を訪問する方向で、宮内庁が検討を始めたことが分かる。北海道の高橋はるみ知事を皇居・御所に招き、被災状況について説明を受ける。

徳仁、雅子◆羽田発の民間機で福岡県入り。福岡市博多区の福岡国際会議場を訪れ、環境や安全保障について話し合う「第4回世界社会科学フォーラム」の開会式に出席。これに先立ち、新宮町にある障害児の医療施設「柏屋新光園」を訪問。

【9月26日】



徳仁、雅子◆前年7月の九州北部の豪雨で大きな被害を受けた福岡県朝倉市で復興状況を視察。仮設住宅で同市や隣の東峰村の被災者らと懇談。

高御座◆新天皇の即位を国内外に宣言する翌年10月22日の「即位礼正殿の儀」で使われる玉座「高御座」が、保管先の京都市の京都御所から皇居に陸路で搬送される。新皇后が使う「御帳台」も。京都御所で25日午前、高御座と御帳台の積み込み作業が始まり、約3千のパーツに解体、トラック8台に載せ深夜、出発



## おことわりリンク・映像講座

私たち2020「オリンピック災害」おことわり連絡会（略称：おことわりリンク）は、武蔵大学の永田浩三さんのコーディネートのもと、同大学で講座「オリンピックは誰のため？ 何のため？——過去の映像が私たちに語りかけること」を催した。

第一回は九月八日「通底する動員の構造1940〜2020」。まず東京五輪が戦争のため中止となった一九四〇年前後のニュース映画と、『今日甦る！幻の東京オリンピック』（テレビ朝日、八八年）を永田さんが紹介し、三六年ベルリン五輪マラソン金メダリスト孫基禎のテレビ番組を谷口源太郎さん（スポーツジャーナ

したと報道。

【9月27日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が、「全国豊かな海づくり大会」の式典出席などのため、10月27日から2泊3日の日程で、高知県を訪問すると発表。

徳仁、雅子◆東京都千代田区のホテルで開かれた「国際青年交流会議」に出席。徳仁が懇談会に出席。雅子は参加しなかったと報道。

【9月28日】

明仁、美智子◆在位中最後となる国体の

リスト）が解説する。戦後については永田さんがNHK映像で六四年東京五輪への道のりをたどり、谷口さんが『だれのためのスポーツか』（英BBC、九二年）で「勝利至上主義」「変わるアマチュアリズム」「ビジネス化の功罪」「テレビによる支配」など現在に至るスポーツの問題点を明確化。天野恵一さん（おことわりリンク）が一九四〇年『皇紀二六〇〇年とファシズム体制などをめぐってコメントした。

第二回は九月一六日『政治』と『芸術』レニ・リーフェンシュタールと市川崑を

読み解く」で、三六年ベルリン五輪と六四年東京五輪の記録映画をとりあげた。『民族の祭典』『美の祭典』（リーフェンシュタール、三八年）については永田さんが技法やその影響、政治と美学をめぐる論争などを解説。『東京オリンピック』（市川、六五年）については天野さんが、完成後の論争のなかで同作を「政治」と無縁の

総合開会式に出席するためとして、羽田発の特別機と陸路で福井県入り。石川県小松空港に到着後、陸路で福井県に入り、坂井市の県教育総合研究所教育博物館を訪問。

【9月29日】

明仁、美智子◆福井市の福井県国際交流会館で国体関係者らと共に昼食。総合開会式が行われる県営陸上競技場に移り、国体開催を盛り上げる式典を見学し、開会式に出席。開会式後に大会関係者と面会。台風24号の影響で、陸路と特別機で

「芸術」として擁護した声に対して、非「政治」性こそ動員を促すと、リーフェンシュタール作品にもつながる問題を提示する。さらに谷口さんが、市川作品には出てこないインドネシアと朝鮮民主主義人民共和国の選手団引き揚げなど、六四年五輪がまねいた多くの「災害」についてコメントした。

「おことわり」連続講座は、2020オリンピック中止をめざして、まだまだつづく。

（2020「オリンピック災害」おことわり連絡会／宮田仁）

## 大軍拡と基地強化にNO！アクション2018集会

「大軍拡・基地強化NO！アクション2018」は、九月一日、文京区民センターにおいて、「持つな！」「敵基地攻撃力」2019年度防衛省概算要求を斬る

1日早く帰京。

【9月30日】

明仁在位30年◆超党派の国会議員連盟と財界などが主催する明仁の在位30年を祝う祭典が、翌年4月10日に東京・隼町の国立劇場で開かれることが分かる。明仁、美智子の結婚60周年の記念日に当たり、2人が出席する方向で、与野党議員らによる「奉祝国会議員連盟」と、経団連幹部らが参加する「奉祝委員会」がそれぞれ11月までに発足し、演目などの調整を進めると、複数の関係者が明らかに。

9・11学習討論会」を開催した。参加者は三名。

まず三つの報告、吉沢弘志（パトリオットミサイルはいらない！習志野基地行動実行委員会）「二〇一九年度概算要求の概要」、木元茂夫（すべての基地にNO！をファイト神奈川）「二〇一九年度防衛予算海上自衛隊は何をやるうとしているのか」、横山哲也（語らびや沖縄もあい練馬）「奄美の現状、概算要求から見る南西諸島軍拡」を受けた。吉沢からは、過去最高の五兆二五五億円の概算要求の概要と共に、防衛省が基にしている「統合機動防衛力」などの「考え方」についても報告を受けた。木元からは、「いずも」の本格空母への改装は先送りされたものの、イージス艦の改装を進め、米第七艦隊との「共同巡航訓練」を急拡大している海上自衛隊の現状が報告された。横山は、「防衛力の在り方検討会議」などで中国脅威論などを理由とした南西諸島重視

の方針が出された二〇〇四年頃から今につながる動きが始まったこと、やろうとしていることは八〇年代の「ソ連脅威論」に基づいた「シーレーン防衛・三海峡封鎖」を「南西諸島シーレーン防衛・南シナ海防衛」に焼き直したものであることを指摘し、海洋基本法や奄美振興予算を使って基地建設を奄美に受け入れさせていっている状況の報告がなされた。

一日には、大軍拡予算に反対する防衛省申し入れ行動を行った。暴風雨の中、一八名の参加を得た。

二月一日、講師・大内要三さん（ジャーナリスト）、テーマ「現在と新しい防衛大綱」（仮）で、「改憲を先取りする新しい『防衛大綱』」に反対する12・15学習・討論集会（仮）を文京区民センターで開催する予定だ。本予算案を踏まえた防衛省交渉も考えている。今後の取り組みに、注目とご参加を訴える次第である。（大軍拡と基地強化にNO！アクション2018／池田五律）

## PP研連続講座 東京オリピックと『生前退位』

.....

九月一日、ピープルズ・プラン研究所（PP研）主催の「平成」代替わりの政治を問う連続講座第七回が開催された。この回のタイトルは「東京オリピックと『生前退位』——ナショナリズム大イベントがねらうもの」。問題提起者は、宮崎俊郎、小倉利丸、天野恵一と、本紙ではお馴染みの顔ぶれだった。

宮崎さんからはオリピック反対運動の視点に立った問題提起。オリピックが「平和の祭典」と観念されることによって、監視社会、ナショナリズムなどがオリピック招致・開催によって醸成・強化されている現実を批判させない社会が作り上げられていることを、具体例をあげながら指摘した。いま話題となっているボランティアについては、ナショナリズム批判の視点から「ボランティアとして国家行事に動員していくことに意味がある」ことへの批判の重要性を語った。この間の反オリピック運動についてのまとまった報告も。

小倉さんは、「明治一五〇年」の断絶と継続という問題提起から始まり、この国のありよう——ナショナリズム、戦争、「日本人」、天皇制等々について言及。そして、国や「国民」の虚構性と、そこによって立つ「日本人」というアイデンティティ、その虚構をベースにしたナショナリズムへと話は進む。オリピックの問題は国別という枠組自体にあること、敵・味方意識の再生産をとおして「国民」「国家」に収斂していくイデオロギー装置があり、国際スポーツは「平和」を装いながら戦争の感情を正当化すると批判。

最後に反天連の天野から。先のお二人の話の共通点としてあった、オリピックと天皇制のもつタブー性（批判を許さない）という共通性の指摘を受けて、一九九七年の長野冬季五輪反対運動の経験から問題提起。オリピック批判の記事に入れた、天皇を揶揄する形で描かれ

た挿し絵（貝原浩の漫画）が掲載不可となり争った経験など紹介した。

その後の議論も大いに盛り上がった。

（反天連／大子）

## 生前退位、何が問題か第4回学習会「道徳教育に潜むもの！」

.....

「一九五八年の導入以来現場ではお茶を濁されてきた『道徳』の『特別の教科道徳』化で出てきた『別業』（他教科での道徳の扱い方を記述）は食わせ物だが、『道徳』は必要」との立場から、新教材「およいけりすさん」（単元……とちとちとなくよく）を使つての実践報告の後に、レジューメ「道徳」教育に潜むもの／万世一系の天皇制維持か」と「道徳の内容の歴史1890～2015」や国定教科書第五期関連頁など貴重な資料を用意されての北村さんのお話を聞き、最後に道徳自主編成の限界等を巡る議論をしたが、「道徳の教科化は大事件！」と訴える北村講話の要点を、押さえた視点として箇条書きして、報告したい。

①教育勅語と教育基本法が併存できるといふ考えに対する危機感から、一九四八年に教育勅語排除・失効決議が出され、五七年まで、「道徳」が日本の教育から消え、五八年「道徳」導入後も、途中八九年に徳目三二項中に「孝行」が、共通教材指定があった音楽に「我は海の子」が入れられたものの、「道徳」の実体化・教科化はさせなかった六〇年があった。

②二〇一四年大津市での虐め自殺事件

を利用して「特別の教科道徳」ができて以来、「頑張り、分際を弁えろ」満載の道徳教科書は、〇三年施行の健康増進法と相まって、丈夫な身体と逆らわない精神を持つ、大人にとつて都合の「ヨイコドモ」作りを狙っている。

③教育出版が載せた「アイヌのほこり」（文化面に偏る補習教材だが）を使つての「アイヌ民族の現状を知り・共生の課題を考える」授業計画案（北教組）は注目すべき。

④「アスリートの頑張りを見習え」「ああいふ障害者だといひね」と差別助長的にオリピックの道徳教材化が目立つ。時に掲揚・斉唱時の不起立への疑問等々を有名人に吐かせて。

⑤「よりましな」教科書採択に後退してきた取り組みは、検定を廃し、自由出版・自由採択・しかも無償を目指し、「道徳」教育教科そのものを返上する運動へと発展させよう。

（日の丸と君が代の法制化と強制に反対する神奈川の会・東京／大友深雪）

## 天皇代替わりと民主主義の危機——関西連絡会が集会

.....

九月二七日午後六時半から、エルおさか南館ホールで、「天皇代替わり」に異議あり！関西連絡会」の主催で、「天皇代替わり」と民主主義の危機——主権在民と政教分離に反する天皇代替りを問う」と題して、横田耕一さん（九州大学名誉教授・憲法学）の講演集会を開催した。

この日は、「朝鮮学校無償化裁判」の控訴審判決が大阪高裁であり、一番の判決を覆し、「北朝鮮の影響下にある」として、無償化の対象からの除外を合法とする極めて不当な逆転敗訴の判決があり、同時に集会があったにもかかわらず、一七〇名余もの参加をいただいた。

横田さんからは、「生前退位メッセージを発した天皇に圧倒的多数の人々が共感しているという現実を押さえておくべきである」との指摘がなされ、憲法をきちんと読んで反論できるようにしないと説得的な反論はできない、天皇制に反対する論拠をきちんとそれぞれがもつ必要があるとも話された。

五〇年代の大衆天皇制と現在が大きく様変わりしており、「親しみをおぼえる」から、若い人々には尊敬の対象となつて

ている状況がある。また「開かれすぎて」「皇族が減っている」「天皇祭祀の基盤である農耕社会が壊れている」など天皇制の危機ともいわれている。

最後に、「私の考えですが」と前置きして、天皇制＝天皇教を無化するためには、「一人一人がお互いを大事にする」。人権が我々の中に本当に定着したら、天皇なんか飛んでいってしまう。「天皇はけしからん」といつていても何も解決しない、「天皇はいて当然」「差別があることを当然」とする私たち一人一人の意識を変えないと天皇制をなくせない、と締めくくられた。

そして「天皇とはいったい何なんだろう」「天皇はなんで人々にこんなうけるんだろう」ということを考えて、天皇をどうやってなくせばいいだろうかという

## 集会・デモくらい自由にやらせろ！

九月二九日、新宿区による集会・デモの公園使用制限に抗議する新宿デモ、集会所で行われた（主催・集会・デモくらい自由にやらせろ！実行委員会）。大雨の中ではあったが、幅広い分野から七〇人が参加して、東口アルタ前から繁華街を通過して区役所前では抗議のコールを叩きつけた。日本キリスト教会館の集会（六〇名）では、鶴飼哲さんが、レイシズムと治安、オリンピックの問題をからめて提

## 【学習会報告】 安丸良夫『近代天皇制像の形成』

（一九九二年、岩波書店）

今回（九月二五日）は標記の本を取り上げた。

この本は、近代天皇の絶大な権威がどのように作られたかという問い、それは天皇自体からよりも、天皇の権威を必要とする人びとが作ったのだと答える。本書の論理は次のようだ。幕末・維新期に、支配権力樹立に向かう国家指導集団及び自らの指導する村落に秩序を取り戻したい

村落指導勢力は、この時期、内外から迫る体制の危機に面して、おりから社会全体に広がる民衆の民俗信仰世界が持つ反秩序のエネルギーを鎮圧し、秩序の諸原理に沿って編成替えする必要があった。

このとき先頭に立たされるのが、秩序の根源と想定される天皇、国体の権威である。彼らはこれを作られるべき国家の文明化の方向に結びつけ、これをもって「愚

民」の反抗のエネルギーを国家にとってのエネルギーとして吸収するのだ。

こうして近代天皇制は国民的に受容される社会的基盤を得、超越的な権威として働く。しかしそれは内に包みこんだ民衆の本来反抗性をもつエネルギーとの矛盾を潜在させることになり、現代にまでわたって反天皇制の契機がここに求められることになる。

著者のこの見方に対して、近代全体を通じて観察されるべき近代天皇制形成過程を明治維新期だけで考えることの無理、幕末期民衆意識の受動性だけでなく、その後それが能動化していく先で国体観

念が待ち受けていたのではない。民衆の生活世界に本来反天皇制の契機が潜在しているという見方の甘さなどが指摘され、一方で宗教界を国家につなぎとめるため、社会文明化の片棒をかつがせ、また憲法秩序に「宗教の自由」、裏返せば国家神道が盛り込まれるという考えに興味が示された。また一九七〇年代ごろ本書の著者に対し若い知識層の一定部分が関心をもった理由なども語りあわれた。

次回（一〇月三〇日）は、菱木政晴『市民的自由の危機と宗教——改憲・靖国神社・政教分離』（白澤社）

（伊藤晃）



るのだ。この理屈が通れば街中でのデモは不可能になってしまうのだ。既に、豊島、中央、千代田、渋谷、品川など各区でも公園使用規制が強まっている。

さらに東京都は九月、ヘイト規制・LGBT差別禁止を名目に、「人権尊重条例」を提出した。問題は差別撤廃の理念やヘイト概念規定があいまいなまま、公共施設の使用制限が前面に盛り込まれている。都議会では共産党や立憲民主も「原案賛成」という状況下、一〇月五日の都議会本会議可決への抗議情宣が行われ、フリージャーナリストの有志や研究者も合流してともに声を上げた。二〇一九年天皇代替わり、二〇二〇年オリンピックに向けての規制の強化を阻む広範な闘いを――

(実行委／藤田五郎)

## はん天日は

9月8日(土) ● オリンピックは誰のため? 何のため? 過去の映像が私たちに語りかけること 第1回(集会の真相参照)

9月13日(木) ● 原発被ばく労災あらかぶさん損賠訴訟第9回口頭弁論

9月15日(土) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第7回 東京オリンピックと「生前退位」(集会の真相参照)

● 朝鮮敵視政策を改め日朝国交交渉の再開を! 9・15集会

9月16日(日) ● オリンピックは誰のため? 何のため? 過去の映像が私たちに語りかけること 第2回(集会の真相参照)

相参照) 9月17日(月・休) ● フクシマと共にさ

ようなら原発全国集会

9月20日(木) ● 生前退位、何が問題か「道徳」教育に潜むもの! (集会の真相参照)

9月26日(水) ● 警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法 住民訴訟第9回口頭弁論

9月29日(土) ● 立川「防災航空祭」反対デモ

● デモの公園使用制限を許すな! (集会の真相参照)

10月8日(月・休) ● 1964→2020 スポーツ(活動)の主役は誰か

● 練馬観閲式反対集会&デモ

10月14日(日) ● オリンピックの光と影 谷口源太郎さんいわき講演会

● 福島原発事故緊急会議連続シンポジウム「福島とチェルノブイリ」

## 集会情報 INFORMATION

開催中 2019年2月17日 ● 日本人「慰安婦」の沈黙

13時〜18時(月・火・休日休館) / WAM・女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先: 同館

(03-3202-4533)

10月20日(土) ● 東海第二原発運転延長STOP! 首都圏大集会

17時45分開場・18時30分開始 / 日本教育会館3F(地下鉄神保町駅) / 鎌田慧、吉原毅、村上達也、おしどりマコ・ケン / 主催: ともよう! 東海第二原発首都圏連絡会 (070-6650-5519 柳田)

● 朝鮮半島の「大転換」と日本の進路

18時開場・18時30分開始 / 文京区民センター3A(地下鉄春日駅ほか) / 権赫泰、中野敏男 / 主催: 3・1朝鮮独立運動100周年キャンペーン実行委員会 (070-6997-2546 渡辺ほか)

10月21日(日) ● 差別・排外主義を許すな新宿ACT-ION

14時30分集合・15時出発 / アルタ前(JRほか新宿駅) / 主催: 差別・排外主義に反対する連絡会

10月22日(月) ● 「明治150年」記念式典反対デモ

18時30分集合・19時出発 / 日比谷公園霞門(地下鉄霞ヶ関駅ほか) / 主催: 同実行委員会 (090-3438-0263)

10月25日(木) ● 安倍靖国参拝違憲訴訟・東京控訴審判決

13時30分開廷 / 東京地方・高等裁判所101号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

● 辺野古新基地NO!これが民意だ

18時30分開場 / 文京区民センター3A(地下鉄春日駅ほか) / 安次富浩、白藤博行 / 主催: 辺野古への基地建設を許さない実行委員会、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック (090-3310-4140)

● 派兵時代の天皇制

18時40分開場 / 練馬区厚生文化会館(西武池袋線練馬駅ほか) / 井上森 / 主催: アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会 (090-5296-5893 池田)

10月28日(日) ● 未来からの透視 ロシア革命百年第5回

14時 / 柴中会公会堂(JR立川駅) / 太田昌国 / 主催: シビル (042-524-9014)

11月3日(土・休) ● 止めよう! 改憲発議 国会前大行動

13時30分 / 国会正門前(地下鉄永田町駅) / 主催: 戦争させない、9条壊すな! 総がかり行動

11月9日(金) ● 即位・大嘗祭違憲訴訟の会・立ち上げ集会

19時開始 / 文京シビックセンター4Fシルバホール(地下鉄後楽園駅ほか) / 加島宏ほか / 主催: 同準備会 (sokudai@mail.zhizhi.net)

11月14日(水) ● 原発被ばく労災あらかぶさん損賠訴訟第10回口頭弁論

14時開廷 / 東京地方裁判所103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

11月25日(土) ● 終わりにしよう天皇制 2018大集会&デモ

13時15分開場・13時30分開始 / 千駄ヶ谷区民会館2F(JR原宿駅ほか) / 栗原康、森美音子(野戦之月) / 主催: 終わりにしよう天皇制! 「代替わり」反対ネットワーク (090-3438-0263)

12月1日(土) ● 大杉栄「自叙伝・日本脱出記」第1回

18時 / シビル3F(JR立川駅) / 加藤晴康 / 主催: シビル (042-524-9014)

12月15日(土) ● 改憲を先取りする新しい「防衛大綱」に反対する

17時30分 / 文京区民センター3C(地下鉄春日駅ほか) / 大内要三 / 主催: 大軍拡と基地強化にNO! アクシオン 2018 (03-3961-0212 北部労働者法律センターほか)